

立教大学経済研究所主催 公開講演会 「アイン・ランドとアメリカ自由市場資本主義の底流」

開催日：2016年1月20日（水）18時30分～20時45分

会 場：池袋キャンパス 8号館 3階 8303 教室

講 師：▽脇坂あゆみ氏（アイン・ランド翻訳家）

『肩をすくめるアトラス』の思想と米国の政治文化」

▽ヤロン・ブルック氏（アイン・ランド研究所長）

「自由資本主義の道義的基礎—茶会党（Tea Party）・FRBと金本位制・格差と公平をめぐる経済政策思想」

司 会：櫻井公人（本学経済学部教授）

2016年はアメリカの次期大統領選を迎え、本公開講演会を実施するタイミングとしては、主要政党の予備選挙の動向とあわせてアメリカの政治経済社会を改めて理解する非常に時宜を得た企画であった。

リーマン・ショック後の金融危機と不況から回復途上にあるアメリカ経済ではあるが、トマ・ピケティ氏の『21世紀の資本』（みすず書房）が示すまでもなく、アメリカ社会における経済格差は、世界の注目を集めている。現職のオバマ大統領が目玉政策として導入した医療保険制度（オバマケア）は、米国上下両院で廃止法案が可決され、大統領の拒否権発動で制度は存続するものの、社会的制度として定着するには時間を要する状況である。この混乱の背景には、国民皆保険を政府の担うべき事業と位置づけて導入を何度も試みてきた民主党と、そうした政策は「小さな政府」を標榜する共和党によって常に反対されるという基本的な構図がある。こうした基本的図式の底流には、どのような政治文化や社会的思想があるのか、その精神的支柱はどのような哲学によるものかを、簡潔明瞭に答えることは容易なことではない。

今回の公開講演会は、アメリカの保守政党サイド、なかでも、注目される勢力を保持してきた茶会党（Tea Party）に近い群衆やシリコンバレー経営者ら実業界、リバタリアンを自認するひとびとに絶大な影響力をもつ作家、アイン・ランドを取り上げて、アメリカ社会を深く洞察する機会となった。

第1部では、日本ではまだあまり知られていないアイン・ランドについて、同作家の翻訳家である脇坂あゆみ氏が、アイン・ランドの人生とその著作がアメリカ社会にどのような影響を与えてきたか、自身の在米経験を踏まえてわかりやすく解説を行った。

続いて、アメリカの非営利法人アイン・ランド研究所の所長、ヤロン・ブルック氏がアイン・ランドの思想・主張が米国の政界ばかりでなく、シリコンバレーなどベンチャー企業家など多方面にわたって影響力を持ってきたこと、また、その思想は決して無政府主義ではなく、国防・司法などにおいて確固とした政府の役割を示していることを主張された。政府の唯一かつ重要な役割は、個人の能力の発揮（個人の権利）を妨げないこと（守るこ

と)にあり、個人の権利を最大限にすることが経済的にも正しいし、道徳的にも正しいというのがアイン・ランドの思想であるとされた。また、誤解されてはいけないこととして、同研究所は非営利法人なので、決して共和党などの特定政党を支持してはいないと明言された。

第2部は、講演者2名に対して学内外から参加した出席者らによる質疑がフリーディスカッション形式で行われた。

以下、それぞれの講演録を編集し、紹介・報告する。

1. 脇坂あゆみ氏の講演『肩をすくめるアトラス』の思想と米国の政治文化

皆さん、こんばんは。ただいま紹介にあずかりました、『肩をすくめるアトラス』を翻訳した脇坂と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

本題に入る前に、わたしは1993年にワシントンD.C.のアメリカン大学というところで国際関係を勉強しておりました。その当時、わたしはアイン・ランドというのは全く読んでいないときで、南アメリカの開発経済や途上国経済、第三世界など、そういうところにフォーカスしておりました。ですから、どちらかというと輸入代替政策など、アイン・ランドと真逆のほうの経済政策を勉強していたような次第です。その大学を出て、同じワシントンD.C.のジョージタウン大学というところに、もう少し国際関係をやりたいなと思って行ったのですが、その間にちょうど「アイン・ランドを読まないでだめだよ」ということを学生の友達に言われました。

実は、『肩をすくめるアトラス』ではなくて、その1つ前に『The Fountainhead (水源)』という、もう1つすごく有名な本があるのですが、それを読んで大きな衝撃を受けました。面白くてすぐ読んでしまったのですが、この『肩をすくめるアトラス』というのを大学院のときに読んで、わたしはアメリカに大学4年、大学院2年、仕事で1年ぐらいおりましたので、いろいろな政治学、経済学の本を読みましたが、アダム・スミス、シュンペーターとか、すばらしい本を含めて、これほど衝撃のある本はわたしにはありませんでした。結局、国際関係とは全くない民間企業で今も会社員として働いているのですが、ここで学んだアメリカの思想潮流というか、底流みたいなことを、アメリカを理解するという上で日本の読者が知らないといけないのではないかという気持ちで翻訳をしました。わたしも目からうろこのようなことがあったのです。

昨今、大統領選を見ていまして、テッド・クルーズ、ロン・ポールをはじめ、ランド・ポールらを見ていたときに、その前提になっている政治文化はここに出てきているというのをちょっとお伝えしたくて、少しでも皆さんのご参考になればと考えた次第です。『肩をすくめるアトラス』を訳している中で知り合いましたヤロン・ブルックさんがいらしているので、せっくなのでということで、機会をいただきました。アイン・ランド思想というと、わりとアドボカシーグループなので、ブルックさんはアイン・ランドの思想をお伝えするというポジションではあるのかもしれませんが。

簡単に、そもそもアイン・ランドとは誰なのかということと、今のアメリカの政治にどういう影響を、もうご存じかもしれないのですけれども、お話しさせていただきたいと思います。

まず、アイン・ランドというのは、もう 20 世紀の歴史の産物だったと思っています。彼女は 1905 年にサンクトペテルブルクに生まれました。革命前のロシアのもう最後の最後の、絢爛たる文化ですよ。本当に文学でも音楽でも、トルストイ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、もう日本人が大好きな文学者、音楽も華やかな時代の名残があったころ、ユダヤ人の家庭に生まれています。非常に裕福というわけではなかったのですけれども、薬局を経営していて、わりとお金持ちだったのです。そういうところではフランスの本を読むということで、ビクトル・ユゴーを愛読していたといわれています。1917 年ロシア革命があって、彼女の家族の資産が全て国有化されてしまうという体験も経て、共産主義というのはとんでもない邪悪なシステムだということ、もう幼いころから体験として生きてきたというのが彼女のバックグラウンドです。

ちょっと手前みそですが、わたしは『肩をすくめるアトラス』のほかに彼女の自伝的小説を訳しております。この辺は『われら生きるもの』に詳しいのですけれども、スターリン前の、本当にロシア革命直後のロシアの話が書いてあります。彼女はそのときにレニングラードにいたのですけれども、まだ出国ビザもゆるい時代で、なんとか出国ビザを手にして、シカゴの親戚を頼りにアメリカに渡ります。それでハリウッドに行くと、セシル・B・デミルという偉大な映画監督の映画スタジオの門をたたきました。紹介状を持ってセシル・B・デミルの映画スタジオに行ったのですけれども、「電話をするから」と言われて門前払いを食らってしまったのです。そのスタジオを出ようとしたときに、コンバーティブルの車でセシル・B・デミルが入ってきたのです。じーっと見ていたら、セシル・B・デミルが車をとめて、「何をしているんだ」、「いや、映画をやりたくてロシアから来たんです」と言ったら、「ちょっと乗りなさい」みたいな感じで、ハリウッドでシナリオ作家の卵として契約したというエピソードがあります。その彼の代表作の映画の 1 つ、『キング・オブ・キングズ』に彼女はエキストラとして出ているのですが、そこで出会ったアメリカ人のフランク・オコーナーと結婚して帰化します。

1931 年に “We the Living” というロシアを舞台にした本を書くのですけれども、あまり売れませんでした。あと、アメリカは今でこそ共和党とか、ティーパーティーとか言っていますけれども、そのころ知識人たちは非常にリベラル、共産主義、社会主義の教授、ライター、ジャーナリストなどが多く、特にハリウッドは今でもそうなのでも、非常にリベラルなカルチャーの中で、この小説は受け入れられなかったということです。3,000 部出版して、もうそれっきりになってしまいました。

彼女を一躍有名にしたのが、先ほど申し上げました『水源』、“The Fountainhead” という小説です。これは 1937 年、建築事務所で働いたりしながら、そのころフランク・ロイド・ライトが、帝国ホテルを設計したずっと後ですけれども、彼女はフランク・ロイド・ライ

トが大好きだったのですが、彼をモデルにして1人の建築家を別のアンチヒーローと対比させています。テーマは個人主義なのですね。個人主義、アメリカの individualism とは何かという本を書いて、すごく面白い小説なのですが、これがベストセラーになります。それでキング・ヴィダー監督によって映画になって、実は日本語でも出ています『摩天楼』、ゲーリー・クーパーとパトリシア・ニールの映画で、今もDVDで売っていますけれども、これがベストセラーになって有名になりました。

ここまでは別に政治的なフィギュアではなかったのです。ところが、彼女が異国アメリカに来て適応するのが精いっぱいだった1930年代、1940年代を経て、まわりを見渡して、彼女はロシアから来たのですけれども、思想的にアメリカが、1940年代、1950年代にわりと社会主義ですとか共産主義ですとか、どちらかというところと共和党と反対側の思想がポピュラーになっていくのを見て、何か違うのではないかと。それで書いたのが資本主義の道徳的弁明をテーマとする『肩をすくめるアトラス』です。

そのころアメリカで言われていたこととして、アメリカ人は共産主義がそんなに好きではないのですが、共産主義は理想としては素晴らしいけれども、実際はワークしないというのがよく言われていたことです。彼女の議論は、「いや、共産主義はもう道徳的に問題なのだ」というものでした。それが経済的にどうか、そういう問題ではなくて、モラルの問題としてだめな制度なのだということをここでやりたかった。アダム・スミスが経済的な実効性を証明しているのではないかと。でも、倫理的にだめなのだよというのを書いたのが『肩をすくめるアトラス』です。

しかし、そんな小難しいことを書いてはいるのですが、非常に面白い小説であり、『水源』でもう有名になっていたので、これはベストセラーになりました。それと同時に、アイン・ランドはわりと政治的なところにも影響力もち、活動するようにもなりました。マッカーシーの時代とか、いろいろ、反共産主義的な動きがアメリカであった20世紀の中盤に、友好的承認、つまり共産主義、反共産主義の承認としてロナルド・レーガンらと議会で証言したりということもありました。あと、フリードリヒ・ハイエクとか、ハイエクというよりはミルトン・フリードマンに近いかと思うのですが、いろいろな保守派の経済学者とも交流があったということです。

『肩をすくめるアトラス』を書いた後、知識人たちの中では全く認められなかったのですが、若者たちのフォロワーがどんどんついてきて、ナサニエル・ブランデンという弟子みたいな人がいたのですが、しばらく彼女の思想をオブジェクティビズムと名付けて広めるという活動をしていました。1960年に“For the New Intellectual”、1964年に“The Virtue of Selfishness”、『利己主義の美德』ですね。1980年に“Philosophy: Who Needs It”という作品、論文集を書いて亡くなりました。レーガノミクスの前に亡くなったというのが彼女の簡単な人生というか、経歴です。

アイン・ランドの影響は数字にはしにくいですが、先ほども申し上げたように、

わたしはワシントン D.C. にいて考え方みたいなところですがよくわからないことが多かったのですけれども、アイン・ランドを読んで、なるほど、そうかと目からうろこが落ちたその文化的な肌感覚みたいなものがすごくよくわかります。ただ、それはわたしがわかるということもありますし、実はアイン・ランドを 1950 年代、1960 年代、1970 年代に読んだ人が、それまではものすごく嫌われて罵倒されていた人だったのですけれども、それを読んでいた若者たちが、レーガン政権は 80 年代のころになってやっと影響力を持ち始めるようになりました。ビジネスの世界でもそうなのですから、特にレーガン政権内で最も影響力のあった思想家と言われていたりしております。例えば、マーティン・アンダーソンという政策スタッフもアイン・ランドと交流があったりして、徴兵制を廃止するというのをニクソンに提案して実現したりしました。マーティン・アンダーソンはレーガン政権の中でも規制緩和等々の政策を推進していたスタッフです。

1990 年代になりますと、聖書に次いでアメリカ人が人生で最も影響を受けた本というサーベイがあって、非常によく知られるようになりました。1950 年代に彼女の本が出たときには、主要メディアで彼女を礼讃するメディアもなかったですし、むしろマジョリティではなかったですし、主流なアカデミズムのリテラチャーが登場することもなかったのですけれども、2000 年代に入ってフォックスニュースですとか、いろいろなところで薦められるようになりました。それもやはりメディアを仕切っている人、メディアの偉い人たちが、つまりアイン・ランドを読んだ人たちが次第に上層部に来るようになったせいかなと思います。

一番有名なのが、これはちょっとブルックさんが同意してくれないかもしれませんがけれども、アラン・グリーンズパン。1990 年から 2000 年代のアメリカの政治・経済の文脈ではとても重要な人だと思いますが、彼はもともとケインズ主義者だったのですけれども、アイン・ランドに出会ってアイン・ランドのサロンに出入りすることで、もう完全な自由市場主義者になったと言われています。フォードのアドバイザーを務めて、ニクソンのアドバイザーも務めて、最終的にはクリントンの時代も含めて、フリーマーケット主義者として FRB に行ったのです。グラス・ステイガル法関連の議論を、議会で証言をしていたときに、わたしもいたのですけれども、とにかくアイン・ランドっぽいことを言っている人でした。1990 年代になっても、本来は金本位制が理想だというようなことを言っていました。

近いところでは 2012 年の米国大統領戦ですね。ポール・ライアン副大統領候補でしたけれども、これは 2010 年の中間選挙のときに茶会党（ティーパーティー）が大勝利した時のことです。それまで共和党と言えば、実は伝統的に大きな政府だったのですが、いつの間にかフィジカルコンサーバティブというのが共和党の共通の認識みたいになってしまいました。それは、アイン・ランドの影響がとても大きいと思っています。このポール・ライアン（現下院議長）という人はアイン・ランドの『肩をすくめるアトラス』を読んで、政治家を志したと言っております。だから、共和党はもうティーパーティー系といいますか、財政的なコンサーバティブの人をある程度取り込まなければ勝てないという状況になっ

てきているのだなと感じていたのが 2012 年です。結局この人は、ミット・ロムニーには負けてしまったのですけれども。

その前に、ロン・ポールという、大統領選でずっと隔つこのほうにいたりバタリアンの元祖リバタリアンみたいな人がいるのですけれども、彼はすごくアイン・ランドが好きで、アイン・ランドを勉強していました。実はアイン・ランドの映画がパート 1、2、3 と最近出たのですが、そのパート 3 に登場しているという、かなり筋金入りのアイン・ランド・ファンです。その息子がランド・ポールですけれども、このランド・ポールの「ランド」がアイン・ランドの「ランド」の影響かどうかというと、多分違って、ランディ・ポールらしいのですが、彼もかなりのアイン・ランドファンとして知られています。

アメリカの政治への影響という意味では、究極のアイン・ランド主義者がテッド・クルーズです。皆さん、討論会とかご覧になっているでしょうか。彼は討論会の前に、constitutional right の擁護者として有名なのですけれども、オバマケアに反対する議事妨害の際に、こんなスピーチをしています。

(スピーチ音声の紹介：省略)

ちょっと聞こえなくて申しわけないのですけれども、もしアイン・ランドを読んでいたければ、『肩をすくめるアトラス』の引用をしているのが分かります。

結局、お金を稼ぐとか、特に 1960 年代、70 年代は、大企業というのがいろいろな面でやり玉に挙がった時代だったと思うのですけれども、そのときにアイン・ランドというのは、大企業やビジネスというのを擁護する人でした。したがって、「マネー・スピーチ」というスピーチの中で、「お金は諸悪の根源ではなくて、全ていいものの根源なんですよ」ということを言っています。

これは特にアイン・ランドというよりはアメリカの文化みたいなものなのではないかと思うのですけれども、「あなたにとっての幸せなこと、あなたにとっていいことはあなた自身が知っている」というのが、アメリカの文化の前提だと思います。とにかく自分で判断するほうが人の判断に頼るよりも正しいということを言っていて、これは個人主義の前提かと思います。逆に言うと、多分、彼女が忌み嫌った全体主義では、自分の幸せ、個人の幸せについては、その個人以外の人のほうがよく知っているというような前提があるかと思うのですけれども、そこについて詳しく書いています。

ところで、『肩をすくめるアトラス』の中にダグニー・タガードというすごく強い女性が出てきます。彼女はフェミニストではなかったのですけれども、とにかく強い女性像というのをつくりあげました。ヒラリー・クリントンも、アイン・ランドを読んでいた時期があったと言います。別にポリティカルなスペクトラムを問わずに、かなり幅広いところで読まれている作品だということですね。

アイン・ランドはしばしば政治的な文脈で語られることが多いのですけれども、本当に

彼女が言いたかったことというのは、政治的な再分配のことではなくて、実はイノベーションだったり、経済成長だったりの源というのは個人にあるのであって、その個人を邪魔しない、とにかく自由を最大化することというのが政府というか社会制度として正しいのだし、それをやる方法というのが政府の機能を最小限にすることだという、かなりベーシックな議論ではあるのですけれども、彼女のすごいところというのは、それを物語の形にしたことでしょう。多分、日本の常識的な考え方の中でなら、再分配を政府の機能、福祉政策をすればするほど恩恵を受けなくなるような中流、収入的には中流以下の人たちまでも、福祉国家よりは自由を求めるというような文化をつくったというのが、やはり彼女の一番大きなアメリカの政治文化というものへの影響だったと思います。

多分、わたしが彼女の話をする中で日本人の方によく言われるのが、「お金持ちはわかるけれども、お金持ちの人たち」、つまりビル・ゲイツだったりとか、非常にお金を持っているシリコンバレーの人たちというのは別に共和党ではないのですよね。ほとんどのお金持ちの人たちは民主党なのです。共和党を支えているのは誰かという、そんなにお金持ちではない。別にお金持ちの人たちの税金が下がったからといって恩恵を受けない中流または中流以下の人たちが、そういう政策を支持するというのが、日本人にとってはすごくミステリアスだと思うのですけれども、多分、自由もそうですしイノベーションもそうなのですが、原則のためだったら、多少の inequality や格差があってもしょうがないよという文化があって、そのルーツというのがアイン・ランドでもあったりしますけれども、そうでなかったりもしますけれども、アイン・ランドを読むとすごくよくわかるということで、ちょっと『肩をすくめるアトラス』を一度お読みいただければと思います。

わたしからはとりあえずアイン・ランドのご紹介ということで、あと具体的に彼女の経済政策ですとか、彼女の経済政策の中でアイン・ランド研究所ですとか、彼女の思想に影響を受けた人たちがどういう考えを持っているのかという権化みたいな人に、本日来ていただいていますので、ヤロン・ブルック氏に質問してクリアにさせていただければと思います。以上です。

2. ヤロン・ブルック氏の講演『自由市場資本主義の道義的基礎—茶会党 (Tea Party) ・FRB と金本位・格差と公平をめぐる経済政策思想』

Thank you all for coming, this is an honor for me to be here to talk to you about Ayn Rand's ideas.

So you heard that Ayn Rand has had a real impact on American politics. She's had a real impact on certain elements within the Republican Party.

I think it's important to note, it's important to understand that Ayn Rand in important ways is significantly more radical, more extreme if you will than anybody in the Republican Party today. They have been impacted by her, they are influenced by her, but they do not agree with her on many of the policies that they suggest and certainly not on the political philosophy from

where she comes.

Take an example of Ted Cruz, where you saw a video where he's reading from Atlas Shrugged.

Ted Cruz strongly believes that government should be involved in social issues. He's very religious, he's very Christian, and he believes that government has a role to play in dictating our personal morality. Ayn Rand would reject that completely. She would reject the idea that the government should be imposing any set of morality at all.

Ted Cruz also happens to be very anti-immigration. Ayn Rand would be fairly pro-immigration, or very pro-immigration, and there are a lot of issues, like this, that I think differentiate all of the people who you saw up there as having been influenced by her, from her actual ideas.

Let's talk about Ayn Rand's actual ideas. And If I speak too fast or something just wave and I can repeat. Ayn Rand believed in limited government. Very limited government. Government that was limited to one thing, and one thing only. And that is to the protection of the individual's rights; protection of individual rights. Now what are individual rights? Individual rights are freedoms to act. When the founding fathers of America in the Declaration of Independence say that all individuals have a right to life, liberty, and the pursuit of happiness. What they mean is that every individual by his very nature has the right to act in pursuit of the values that he believes will lead to a good life, will lead to happiness.

In other words, any individual has the right to act any way he chooses. Free of coercion. Free of force, free of coercion from his neighbor, free of coercion from government, free of coercion from foreign powers and terrorists. Free. So the role of government according to Ayn Rand, is to protect us. From crooks, from criminals from fraud, from terrorists, from foreign invaders. To help us settle disputes through the legal system. That's it. That's it, so a police force, a judiciary, and a military. Government intervention in the economy is coercive intervention in the economy. You can't choose whether to use... whether to abide by the economic laws that the government dictates or not. It's coercive it's by force. So Ayn Rand believed in a separation between the economy and government. So in Ayn Rand world if you will, government has no economic policy. Because government is not involved in the economy.

It doesn't spur demand. It doesn't stimulate consumption. It doesn't regulate. It doesn't have a Federal Reserve. It doesn't have a central bank. Take a central bank as an example.

A central bank is a coercive institution. It drives out all forms of money except the form that it prints. It forces us to use the paper yen in Japan, the paper dollar in America, the paper Euro in Europe. We have legal tender laws that force people to accept this paper money, otherwise it

would probably be driven out by other forms of money.

And it prints that money today based on a group of, in the United States, twelve people who sit around a table and decide how much to print. And as a consequence, a dollar today, is worth 5 cents relative to a dollar when the Federal Reserve was established in 1913. Within 100 years the dollar has lost over 95% of it's value.

And by the way, one of the reasons for establishing the Federal Reserve in 1913 was what? Economic stability. The idea was that a Federal Reserve a central bank would prevent bank crises, would prevent economic depressions and would bring stability to the economy. This was after a financial crisis in America in 1907 where there wasn't a central bank.

So what has happened since the establishment of the Federal Reserve?

Within 60 years after the Federal Reserve was established, the US experienced the Great Depression. If you study the work of Milton Friedman and Schwartz's famous book on the history of interest rates they squarely blamed the Great Depression on Federal Reserve policy. The Federal Reserve messed up. And as a consequence, instead of having a recession, we got a depression. So, the Federal Reserve didn't increase stability, it increased instability.

People tell us, they were young, they didn't know what they were doing, and we have to give them a pass on the Great Depression. That doesn't count. So lets look at the credibility of the Federal Reserve, in terms of creating economic stability post-Great Depression.

Well in the 1970s we got what? What did the world experience, including the US, in the 1970s?

Deflation. What does deflation come from? Well from printing all that money. And we got something that many economists believed was impossible, we got stagflation. That is, we got stagnation and inflation at the same time. Caused by Federal Reserve policies to fix it, the Federal Reserve had to jack up, under Paul Volker, that's history, they had to jack up interest rates in 1981 and 1982, which sent the United States economy into deep recession. In the name of economic stability, we get these big swings.

Now skip forward a little bit, to this latest great recession as they called it.

What caused the 2008 recession? Well we're told, the story right now is that speculation on Wall-Street caused the Great Recession that greed on Wall-Street caused the Great Recession, but as far as I can tell there's always greed on Wall-Street. As far as I can tell Wall-Street always engages in speculation. The question is Why this time did we have such a collapse?

And again I would argue and we don't have time for me to prove this, but I would argue that the 2008 recession is for the most part, not entirely, but for the most part a consequence of poor Federal Reserve policies. Alan Greenspan policies.

After the dot-com bubble burst in the early 2000s, Alan Greenspan lowered interest rates

and then 9/11 happened. There was a risk of recession in the United States. Alan Greenspan lowered interest levels to the lowest level they had been in the history of the United States, to 1%, and he kept them there for 2 and a half years.

Guess what people do when you have very very low interest rates? People borrow money. So Americans borrowed money like crazy. And what did we use the money for? Houses. Why houses? Because the government was subsidizing it. If the government is giving you a subsidy, I'm gonna go use that subsidy, why not? So we all bought houses, very expensive house, because money was cheap and when interest rates started going up in 2005 and then 6 and 7, that's when you start getting the crisis.

So in my view, the financial crisis is a consequence of interest rates being too low, for too long and housing policy in the United States, the subsidy, the Freddie Mac and Fannie Mae, the tax subsidy that was provided. And, if you think about it, it is inherent in the Federal Reserve that we have instability.

Why? By the way, after the financial crisis again they lowered interest rates, this time to 0. We are still living in basically a 0% interest environment, and how has that been working out? The economy has not gone up, it's barely moving.

It is inherent in the Federal Reserve to encourage instability. Why? We understand as economists that price controls are not good. Right? We teach that in economics 101, we teach that price controls are no good. Because central planners plans are not good, they don't have market signals to tell where to set let's say the price of bread. Experience with price controls is that the government tends to set prices too low. And when prices are set too low, manufacturers don't want to produce the good, but everyone wants to buy it, so you get shortages.

So usually government bureaucrats want to compensate for that, so then they bump the price up and they set it too high. So everyone wants to produce the good, but nobody wants to buy it and you get surpluses and if it's bread, you waste the bread, it's thrown away because nobody will buy it at the price that the government has set. So we generally understand that price controls do not work. So we take the one price that, in my view, and I think most economists would agree, is the most important price in the entire economy, the interest rate, and we give central planners the ability to set it.

Guess what happens? They set it too low, or too high, but they cannot set it right. Because what's the right rate of interest? It's just like the right price of bread, it is the clearing price between the supply and demand. The supply of funds which equals savings, to the demand for funds or the demand for loans and the intersection between the supply and demand curves would set the interest rate. But we don't allow that to happen. Because the central planner, in other words the central bank is now dictating what the price will be and as a consequence

central banks have to cause distortions just like if you set the price for bread, you would have distortions in the market for bread.

One of the great miracles of capitalism, in America and I think in Japan, you can walk into any grocery store at any time of day and almost always, there is the bread you want at a price that you're willing to pay for it. Supermarkets don't throw away a lot of bread and there are never lines outside the supermarket of people wanting to buy bread that doesn't exist. That's the beauty of the price system; that's the beauty of free markets.

And yet when it comes to interest rates, the most important price in the whole economy because it dictates other prices, we use it for financing, we use it for credit, we use it to discount huge cash flows in investment process for investment prices, that's the one price we control. So surprise, surprise what do we get? We get instability in the economy. The business cycle, in my view, is to a large extent driven by fed policy, by central banking policy. Same in Japan. You have a period where interest rates are set too low and there's an oversupply of money, and you get speculation and you get real estate speculation and then you get a crash. And since then the bank of Japan has not been able to do anything and it can't because the price it sets will never be right.

So that is just one example of how government, cannot, cannot replace the market. What we need in banking in terms of money is a free banking system like there was in America and in Scotland and in other places around the world before the establishment of the Federal Reserve Banks when banks printed money based on the gold reserves they had and you had real competition. Interest rates were set by supply and demand; supply of loanable funds, demand for loanable funds.

Somehow money, we imagine, is different than any other good in the economy but it's not, it's just a medium of exchange. It's just a facilitator of barter. Money is not special. It's just a way we barter more effectively. Barter your time for the bread. Money smoothes out the process

Okay so let me say, so this is the economic reason why Ayn Rand would object to government intervention in the economy, but it's rooted in something deeper, it's rooted in the fact that government is force. Government is coercion. Government is a gun. And coercion, force, guns... have no place in the marketplace.

The marketplace is about voluntary transactions. The marketplace is about individuals and businesses interacting with one another on win-win relationships, on the basis of trade, of voluntary trade. Once a gun-force coercion is introduced, that voluntary trade is distorted and rights are violated. So Rand is against government intervention in the economy because she believes it doesn't work. And it doesn't work and it doesn't work because it's an introduction of force into human relationships but again we have to go deeper.

If you will, I think Adam Smith would have agreed on that point at least to some extent. Ayn Rand disagrees with Adam Smith more fundamentally. Because for her, it's not just about the outcome, the economic outcome. This is a moral question, an ethical question. Why was Ayn Rand so opposed to coercion? So opposed to force? So opposed to the gun, or the fist or whatever.

Ayn's philosophical framework does not start as Adam Smith's does, and as many economists do, and as almost all philosophers do: with the group, with the collective, with society. Rand starts with the individual, the unit, the important unit, the basic unit of society is the individual, and the question then, as Rand asked from a philosophical perspective,

What is good for the individual? What is good universally for all individuals? What does individual life depend on? What does each one of our lives depend on?

Think of all the values.... the things we need in order to live, the things we need in order to live well, in order to "flourish" to use Aristotle's term. Aristotle believed that the books on morality, the books on ethics were to teach us how to flourish, how to live a good life, how to live the best life we can live. Ayn Rand agrees with Aristotle. And she says what is the one thing that human beings need to do in order to live a successful, flourishing life? Where do all the values that human beings need in order to live that life come from?

And she points out that there is a difference between human beings and animals, the rest of the animal kingdom, if you will. Animals survive by instinct. Animals survive by their physicality if you will. A tiger is strong, a deer is fast. And we, as human beings, physically are not very well designed in order to survive.

You put a human being and you put a Sabertooth tiger, and the Sabertooth tiger eats the human being. Yet, the last Sabertooth tiger I saw was in a museum, and here we are, the most successful species ever.

What makes that possible? The human mind. What makes it possible is reason, what makes it possible is our rational faculty, our ability to figure things out, to solve problems to change our environment to fit our needs, to hunt with tools and weapons, to get food through agriculture, I mean think of the innovation that agriculture was. To make desks, computers... All of these things are products of the human mind. All of the values that human beings need in order to survive are products of human rationality. Thinking of humans. A man and woman are rational beings, are thinking animals.

And what we must protect, if we are to allow the individual to flourish, if we are to allow the individual to be successful, what we must protect is the ability of the individual to think, to be rational and to act on his thoughts.

The enemy of reason. What is the thing that threatens rationality? That threatens thinking? That makes it impossible for us to act on our thoughts and our reason? I mean Uber, everybody

familiar with Uber?

The guy who started Uber had an idea: “Use technology to connect drivers and passengers efficiently to allow people to get from place A to place B without having to call a taxi.” Much more efficient than a taxi... What is stopping Uber where it’s being stopped? Coercion, force.

So coercion and force are the enemies of rational thinking. I mean, think about all the times in human history where people came up with good ideas, brilliant ideas, new ideas. They couldn’t do anything about it. Because what? Somebody coerced them. Usually the state or the church or the powers to be, coerced them into silence or killed them, and that’s the ultimate way to silence someone.

If I put a gun to the back of your neck and tell you from now on that you have to act as if two plus two equals five. You can’t think. You can’t program a computer. You can’t build a bridge. You can’t solve a math problem. You can’t do economics. Coercion is the enemy of reason.

So if we care about human flourishing, individual human flourishing, if we care about human success, if we want to allow people to think new ideas and sometimes they’re bad ideas, sometimes they’re wrong ideas. Then they fail. And if we allow them to act, we want to allow them to act on those ideas so they can be tested. Then what we need to extract from society, is force, coercion. It’s wrong to steal. It’s wrong to murder. We know all this, we’ve always known it and yet we allow the state to do it, whenever it wants. It can decide how much of yours it’s going to take. Why? Because we voted on it.

Rand says no. Stealing is stealing is stealing. No matter how many people are voting on it. It’s wrong to stop Uber. Uber might be a terrible idea, then let it fail. The central banker, the government has no right to coerce people because once you do that, you destroy reason, you destroy freedom and you destroy individual’s ability to flourish and be successful.

So the standard, think about what Adam Smith’s standard was. Adam Smith says that the reason free markets are good, is because they maximize the utility of society, because society becomes richer, because society is better off. He says each individual within an economy, within a free market, acts in their own self-interest, but self-interest is bad, but when we aggregate it with the invisible hand, we get a good outcome for society.

Ayn Rand rejects this reason. She says “no the standard is not society, the standard is the individual”. Individuals pursuing their long-term rational self-interest is good individuals wanting to flourish, wanting to be successful, wanting to be good. Capitalism and a free market is the only system that allows them to do so free of coercion. And that’s what makes free markets moral: not that society is better off, but that the individual is better off. And to the extent that he exercises his reason, to the extent that he works hard and is productive, he will be successful. And to the extent that he’s not he will fail. And just to bring in inequality, that’s why we have inequality. Some people are productive and some people are not productive. So

some people make a lot and some people make a little. That's just reflected in reality. And that's good she would say, there's nothing wrong with that.

So let me wrap up and then we'll take some questions. So for Rand the moral basis of the free market is the individual's right, "inalienable right", to quote the Declaration of Independence, to pursue the values necessary for his own life from coercion. The only way to guarantee that freedom is to create a government that is not allowed to coerce its citizens a government whose only job is to protect them from coercion. Is to protect them from coercion from their neighbors, from their friends... And this is very similar to the original intent of the founding of America.

The original idea of separation of powers was to minimize the power of government. The original intent of the Bill of Rights was to say no matter how many people vote, you can't take away people's property, you can't silence people. Freedom of speech is absolute.

The original intent of the founders was a very limited government that protected us and left us free otherwise. Thomas Jefferson said once "if your neighbor doesn't have his hand in your pocket, what he does with his life is none of your business" in other words if he's not violating your rights, the state has no role in his life. So limited government does nothing in the name of the individual and that's Ayn Rand's view. And that's quite different from Ted Cruz, the tea party... The tea party is very confused. The tea party emotionally likes Ayn Rand's ideas... Intellectually they want government favors, they want government goods.

So that's my talk and then we'll take some questions. Thank you.

3. フリーディスカッション 質疑応答

以上のふたつの講演について、フリーディスカッション形式で行われた質疑を報告する。

[フロア質問] 立教大学はハイエクとフリードマンに名誉博士号を出した最初の日本の大学という意味でも、ランドの考えと少し通じるところは我々の中に持っているかもしれないと思いました。

わたしがちょっと興味と関心を持ったのは、もしも政府の大きさと市場の efficiency level の相関関係をとって研究したとしたら、恐らく幾つかの非常に効率的な経済というものには意外と大きな政府もあったりするのではないかな。例えば、北欧の経済などもその例ではないかな。あるいは、逆に発展途上国のように、政府自体は小さいのだけれども、efficient ではない経済もあるのではないかな。そういう意味では、この議論をそのまま現実の世界に当てはめると、幾つかの矛盾があるのではないかなと思ったので、ちょっとお聞きしました。

〔ブルック氏の回答〕 ちょっと技術的な、テクニカルな話と、経験的、実証的な話と両方でお答えします。

関係はあると思います。ですから、この相関関係をどう見るかというのは非常に用心深くする必要があります。例えば、ジンバブエとアメリカでは政府のサイズが違って同じことが当てはまらないというのですけれども、それは政府のサイズに起因する、その因果関係ではなくて、ほかのいろいろな要素—独裁的な政治体制だとか、別のいろいろな要素—があるので、簡単に相関関係を論じることはできないですね。

歴史を見ることも大事です。人類の歴史の中で最も成功した経済を2つ挙げるとしたら、19世紀のアメリカがその1つです。1776年のアメリカというのは非常に小さな国、小さな経済でしたから、イギリスとの戦争も大したことにならなかった。ところが、1993年には世界最大の経済になっていたわけです。その期間で連邦政府は4%以上のお金、国家予算を経済のために使っていないのです。南北戦争以外では。

もう1つの成功した例は香港です。非常に小さな政府で非常に高い経済成長をしました。ノルウェーは原油を持っているので、ちょっと比較にならないですが。政府の大きさそのものを論じてアイン・ランドの考え方を批判しているのではないので、それは誤解のないようにお願いします。

ですから、わたしたちは同じ意見なのです。政府の大きさそのものではなくて、法の支配があること。政府が何をやるかということが大事です。もちろん政府のサイズというのは、背景にある何らかの代理要因であることは確かです。例えば、アメリカは世界を守るということで大変な軍事費を今つかっているというのは、何かを反映しているわけですよ。ただし、一番鍵になるのは、政府が何をやるかです。政府が経済に介入しない、規制しないほど経済は成長するということです。テクニカルな話だとこんな感じになります。

〔フロア質問〕 新しいビジネスをつくるために友人に投資 (informal equity) をする。友人や自分の同胞に対して投資をするという equity fund というのが非常にアメリカやヨーロッパでは増えています。その点と、individualism というものが非常に関係しているだろうと思います。そこでの市場に対する考え方というのは、明らかに日本の持っている市場感と違うのではないか。その点についてアイデアを教えてくださいという質問です。

〔ブルック氏の回答〕 おっしゃるとおりで、起業家精神の源泉は個人主義なのです。ですから、日本が個人主義でない、あるいは、集団主義的、集合主義的であるだけ、それが機構化されたもの、informal equity が少ないというのは全くおっしゃるとおりだと思います。それを変えるためには、文化が変わることが必要なので、政府が何をやるかという以前の話、もっと難しい話なのです。政府ができることは、政府の政策として起業家精神や個人主義を奨励するような政策をとるということです。

わたしがもし大胆に日本の政策に助言ををするとするならば、ずっと自由な金融制度を構築することです。日本に必要なのは、マイケル・ミルケンですね。巨大企業をバラバラに

して、巨大企業を現在の政策が見ているように、社会的なマトリックスで管理するのではなくて、企業が株主にどれだけ配当しているかということに基づいて解体して建て直すということをする。その過程で労働法も改正して、もっと自由に人を雇用したり、解雇したりできるようにする。そういう大胆な改変が必要だということですね。

ですから、わたしの助言は、巨大な銀行や巨大な企業に依存するのではなく、個人主義を奨励するようなときに、測定の単位はプラトニックな、社会的な、社会にとって何がいいというものではなくて、具体的に企業がどんなリターンを与えるか、どんなリターンを出すかということに基づいた合理的な政策。これをわたしは助言とします。

[フロア質問] アイン・ランド研究所 (ARI) 自体について教えていただきたい。どういう経緯を経て成立したのか、スタートしたのかをお伺いしたいです。それが1つです。これをお伺いするのは、お話で非常に面白かったのは、アイン・ランドの思想と、それから今の共和党の候補者のアイデアの間には違いがあって、アイン・ランドのほうがずっとラディカルだということでした。そうしますと、アイン・ランド研究所は今の政治に対してどういふかわり方をされるのか。共和党との関係はどんなポジションか。このあたりのことも、ARI がどんな組織なのかということとあわせて教えていただけるとありがたいです。

[ブルック氏の回答] アイン・ランド研究所は1985年に設立されました。目的は、アイン・ランドの哲学、考え方を唱道することですね。たくさんの人たちがアイン・ランドの本を読むように、哲学を勉強して研究して、それを実践することを奨励することです。非営利の団体として設立されました。アイン・ランド研究所のミッションは、文化を変えていくという長期的なミッションだったのです。アイン・ランド研究所は、共和党とは全く何の関係ありません。共和党の人々は、アイン・ランドの考えの「ここ」とか「そこ」を都合のいいようにピックアップして政治的に利用しているのですね。でも、アイン・ランド研究所は共和党を支持していません。実は、法律的にそれはできないのですね。アイン・ランド研究所は非営利の団体ですから、政治的な活動は法律で禁止されているのです。

でも、もっと大事なことは、アイン・ランドの考え方で何かを変えようと思ったら、政治から変えるということは愚策だということですね。変革するときは教育から変えるべきです。これは皆さんが大学でやっていることですよね。ですから、アイン・ランド研究所のフォーカスは、大学の教育から変えていく、よくしていくということです。あるいは、中学、高校から、そこに教育題材を提供するということですね。というのは、もし教育がうまくいけば、政治はその後、勝手にうまくいくのです。

[フロア質問] 1つ目の質問は、アイン・ランドは奴隷制度について何を言ったか。2つ目は、現在の主流な経済学では、自由経済にすれば独占が起こるということが信じられてい

ますが、アイン・ランドはそれについて何と言うかという質問です。

〔ブルック氏の回答〕 奴隷制度についてお答えします。人類史上最大の悲劇の1つが、アメリカ建国の父たちが、実は矛盾を内包していたことです。奴隷が権利を持っているということを認めなかった。それは、自由の対立する葛藤ではないのですね。自由をもって奴隷に、誰かに無理強いをするということは、それは自由ではないのですね。誰かをなぐったり、盗んだり、無理強いしたり、奴隷化したりするというのは自由ではなく、自由の侵害なのです。ですから、奴隷の所有者は奴隷を所有する権利を持っていないのです。それは、殺人犯が殺人をする権利を持っていないのと同じことです。ですから、もしも建国の父が首尾一貫した哲学を採用していたら、その時点で奴隷制度は廃止されたと思います。個人の権利を守るために。

実際にはそうしなかったわけですが、それによって非常に血なまぐさい南北戦争が起こり、60万人のアメリカ人が命を落としました。ですから、自由の中に対立、葛藤があるわけではないのです。

アイン・ランドは、個人の権利を守るためであれば、政府の介入は正当なものとして認める。つまり、奴隷制度を廃止するための政府の介入は正当なものなので、アイン・ランド哲学の中で正当なものとして認められているということです。例えば、わたしが銃を持っていて、銃を向けて「撃つぞ」と言う。わたしがもしそれをやったら、政府は正当な権利をもってわたしの行為を妨げる、介入する権利が政府にあるのですね。ですから、アイン・ランドの哲学において唯一政府が無理強い、強制力をもって介入することが許されるのは、例えば奴隷とされている人たちの権利を守ることであったり、殺人者が威嚇していたら、その行為をやめさせること。これは正当な介入です。アイン・ランドは無政府主義者ではありません。アイン・ランドは正当な政府の存在を信じていました。政府の役割は市民を守ることですね。

では、独占の質問に答えます。わたしは、主流のほとんどの経済学の学者が言っていることを否定します。フリードマン、フォン・ミーゼス、ハイエク、この人たちは自由な市場が独占をつくり出すというふうには言っていないですね。わたしは彼らよりももっと強く主張します。もし、市場が自由であれば、独占は起こらないといえます。それを歴史的に実証する例は無数にあります。例えば、古典的な例を挙げると、ロックフェラーのスタンダードオイルですね。

当時、ロックフェラーは自由市場の中で92%の石油を所有していました。アメリカの中でもうほとんど石油を押さえる力を持っていたのですね。経済学者としては、92%は独占ですよ。でも、わたしの定義では、これは独占ではありません。なぜかと言えば、ロックフェラーは独占主義者として振る舞っていないのです。というのは、市場独占者は価格をつり上げていってものの品質が下がっていくというふうに経済学で習いますよね。それをやっていないのですね。これはチャレンジですが、歴史的なデータを見てみてください。データを見れば、もう疑問の余地はありません。ロックフェラーが石油採掘量の92%を持っているときに、価格はどんどん下がっていったのですね。そして、品質は上がった

ていったのです。なぜでしょうか。2つ理由があります。ロックフェラーは、そこが参入障壁のない自由な市場だということがわかっていた。これが1つ目の理由です。もう1つ、ロックフェラーがよくわかっていたのは、原油の価格を下げていけば、それによって原油が使われる新しい需要が発掘されるということを理解していたのです。彼は正しかった。ロックフェラーが正しいのは、過去に使っていたのとは全く違う使い方が現在されているわけです。内燃機関ですね。これは全く合理的なことで、もし原油の価格が低く抑えられていけば、新しい使い方が開発されるということですね。

経済学で代替財ということを言いますけれども、競争を測るときにわたしたちはあまりにもそれを狭く定義していることが多いのです。カルシン油の代替財は何だったのでしょうか。カルシン油の代替財はトーマス・エジソンの電気だったわけですね。歴史上その時点で、経済学者も、政府の規制を行っている人たちも、それを予見した人たちはいなかったのですね。アルコールと反トラスト法の件も全くそのとおりですね。

これはスタンダードオイルだけの話ではありません。1960年代にIBMはメインフレームのマーケットをほとんど100%独占していたというふうに言えますが、これらすべてのケースで価格は下がっていて、品質は上がっていきました。そして、そこに代りの製品が入ってきたのです。例えば、IBMのメインフレームのケースで言えば、DECという会社が登場して、もっと小さいコンピュータをつくりだした。独占は危険なものです。もし政府が独占を企業に与えたとしたら、それは非常に物騒なことです。それは、政府によって作りあげられた参入障壁になるからです。しかし、真に自由な市場においては参入障壁がないわけですから、独占は起こらないのです。マイクロソフトも独占のそしりを受けていましたが、今はGoogleよりもAppleよりも小さなものになっていますよね。なぜかといえば、テクノロジーの市場においては、政府が参入障壁をつくるということをしていないからです。それによって自由な競争が起きて、勝手に独占状態というのはなくなっていく。ですから、自由市場が独占につながるというふうにはわたしは考えていません。それは歴史的に実証されていると思います。

[フロア質問] ハイエクが言ったように、もう中央管理というのはできない。全ての政府の経済に対する介入というのは、もう多かれ少なかれ不可能だと。もともとの質問が、sea sickness、船酔い、長期的には独占もなくなっていくし、長期的には安定するのだけれども、短期的には上下すると。ですから、短期的な船酔いを避けるために政府の短期的な介入は場合によっては望ましいのではないかという質問です。

[ブルック氏の回答] いや、それは全くその反対です。政府の介入がこの船酔いのような上下を起こすのだと。マーケットはスタビライザーなのだというのですね。

日本政府は1991年から無策だったことによって成長がゼロですよ。その手の安定は高くつくということです。日本政府の介入によって成長しないという悪い安定がもたらされたわけですね。それよりも市場に任せて、市場の自然な変化によって成長していくほう

がいいと思いませんか。経済の話徹夜ですることでもできるわけですが、ただ、お伝えしておきたいのは、わたしの議論は経済学についての議論ではないのです。基本的に自由についての議論なのですね。

政府にどの貨幣を使ってほしい、使えというふうに指示されたくない。わたしがどんなビジネスをするか。それは政府のビジネスではない、政府に言われたくない。邪魔しないでほしい。わたしは人の邪魔をしないのだから、政府にわたしの邪魔をしてほしくない。わたしがもし非連続の、破壊的なテクノロジーをつくったとして、そのときに船酔いしない権利はないわけですね。ウーバー（Uber）は、皆さんご存じのように、従来のタクシードライバーに対して船酔いを生じているわけですね。それはいいことです。それによって残りの我々に対してもっと大きな効率を提供しているわけです。もしわたしが中央管理をして安定をつくりだそうとしたら、ウーバーも法律で禁止するし、Apple も禁止するし、インターネットも禁止しますね。そのテクノロジーによって、音楽であったり、全ての産業に対して船酔いを生じるような攪乱をしてしまうからですね。ですから、安定させようと思えば、そういった新しいテクノロジーは全て禁止するということになります。進歩しようと思えば、リスクを取る必要があります。その過程で多少船酔いも甘受しなければいけない。そうでなければ、進歩は起こりません。

[フロア質問] 少なくともある時点から大きな企業、ビッグビジネスというものが存在する。そういう意味での独占の存在として、例えば、穀物市場でカーギルという会社がビッグビジネスです。時々、政府が大きくなりすぎて問題を起す。軍国主義になったり、ファシズムからスターリニズムなど。そうならないように政府を制御するのが大事だと思いますが、他方で、大きな企業も時々問題を起すので、石油を掘るときに垂れ流しにしてはいけないといった規制をかけるためには政府が必要です。それは多分、大きな政府でなくてもいい。規制するために必要悪として最低限の政府が必要だというふうになるのだらうと思います。つまり、一方で政府を小さくする。でも、他方で問題を起す企業を制御する必要もあるのではないか。両方見る必要があるのかなと思いました。

[ブルック氏の回答] 企業が大きいということは特に問題はないですね。大企業が政治的権力を持たなければ。巨大企業が政治的権力を持たないようにするための唯一の方法は、政府が企業活動に介入する力を奪うことです。ですから、国家と経済を分離することですね。だからこそ、経済規制がないのがいいのです。経済規制をいったんつくってしまうと、その経済規制を自分たち大企業に有利にしようと思ってロビー活動をして、政治的権力につながってしまうわけですね。

今の汚染だとか環境問題については、コメントしたいと思います。これは非常に興味深いポイントです。ただ、よく混乱されるポイントですが、政府の権力と企業のパワー、この2つのパワーは全く性質的に異なるものです。基本的に異なるものです。政府の権力というのは強制力、無理強いですね。coercion です。企業のパワーというのは、これは自由

な取引、自由なやり取りに依存したものです。我々消費者というか、ものを買う購買者は別に企業の提供するものを買う必要はないわけですね。買ってもいいし、買わなくてもいい。そこに自由があるわけですね。企業がどんなに巨大であっても、仮にそれが一時的に独占的な企業であっても、必ず代替する何かがあるので、個人の自由が完全に奪われるということはないのです。それに対して、政治権力、政府の権力は強制力を持って個人の自由を奪っていくわけですね。ですから、経済的なパワーに対してわたしは恐れを持っていません。政治的な権力に対して心配、懸念を持っています。

さて、汚染、環境汚染について話をしましょう。政府が規制をすべきだと思いません。しかし、政府の仕事は個人の権利を守ることです。すなわち、個人の生命を守ることです。もし、企業が大気を汚染していたら、有害な物質を大気にばらまいていたら、それによって個人が健康を害するわけですね。ですから、政府の仕事はこの個人を守ることです。ですから、それを防ぐための法律はいろいろありますが、これは個人の生命や権利を守るための法律であって、企業を規制することが第一義的な目的ではないのです。

Externality、外部性についてどう扱うかという、それは内部化することがポイントです。外部性を内部化するというのはどうやってやるかという、財産権をもってやるわけですね。汚染されている地域というのは、私人の財産ではないことがほとんどです。海とか、川とか、誰も所有していないからです。ですから、海や川を私有地化したらどうですか。財産権を山にも川にも海にも与えたらどうですか。わたしの庭に何かを投げ入れてくるやつはいないですよ。なぜかという、わたしが持っているからです。ですから、外部性を内部化するというのはどういうことかという、川であっても山であってもそれを民間の所有にしていれば、それによって正当な法律、法規制によって守ることができる。個人の生命、権利を守ることができる。

今、カリフォルニアは干ばつという問題でまさしくそのような状況が起こっています。カリフォルニア州が水を所有しているのです。カリフォルニア州が、誰が利用権を持っているかということを決めています。それは価格によって決めるのではなく、誰が誰に投票するかという政治によって決まってくるのです。ですから、その水を使う農業に従事する人たちが政治家にたくさんの献金をして、それによって彼らはたくさんの水を手にします。でも、わたしが自分の芝に水をやろうとしたら、それによって罰金が科せられるのです。これをカリフォルニア州ではなくて、価格のメカニズムで制御するとしたら、もしあなたがカリフォルニアの水を持っていたとしたら、それによって価格によって統制、コントロールが行われています。そのほうがずっと効率的なのですね。水の価格を、価値を高く認める人は高い価値をつけます。

経済学の教室で、講義の中で教えられている完全競争と独占の関係は、全く非現実的なのです。現実にはそういう例はない。1人の人が川を完全に買ってコントロールしているということは、現実には起こり得ない。コントロールして、それを価格以外のことで自由に使うということをやったら、必ずそこに別の力が働いて変化していくということです。

もし水が非常に貴重なもので、人々が高い価格でも買うということになれば、そこに別の供給者があらわれて必ず競争が起こるということです。ですから、それが起こらないと

いう完全競争は、フィクションだということですね。

わたしは政府をなくせばユートピアになるというような話をしているわけではありません。完全競争というものを、わたしは信じていません。そんなものは非現実的で存在しないのです。おっしゃったとおりです。プラトニックな理想として、完全競争なるものを想定して経済学を教えるという今の現実が間違っています。それは現実を歪めたものなのです。わたしが言っているのは、政府を経済から引き離すことによって、マーケットが完璧ではなく、ベストな結果をもたらすということを言っているのです。ベストというのはベストでしかないですね。わたしの見方では、政府の介入、規制をそこに入れば入れるほど、ベストから遠ざかっていくということなのです。

〔フロア質問〕 さきほど、19世紀には交渉ということがあったとのことですが、まさに政治的なプロセスでの交渉そのものではないのでしょうか。

〔ブルック氏の回答〕 それは全然違います。政治的な交渉は、強制力を持ったものですね。そこから抜け出すことができないものですね。主流派とか多数派とか、政治権力を持った人たちが強制力を持っている、銃を持っているのですね。ですから、そこから逃げることはできません。

例えば、アップルコンピュータとか、もう巨大な企業、世界最大の企業にわたしが勤めているとして、会社とわたしが交渉したとして、そこには無理強いはありません。どんな巨大企業と交渉しても、そこには強制力、暴力を持った強制力は存在しないですね。そこで合意に達するか、それとも合意が得られなくて交渉から離れるか。もし2つの企業が交渉に失敗すれば、そこで合意が形成できなかった。それだけですね。でも、政府と交渉してみてください。もし政府の言うことを聞かなければ、監獄に入れられるということになります。政治は強制力なのです。市場は自発的な選択ですね。ですから、市場における交渉と政治における交渉は基本的に全く異なるものなのです。

以上のように、本公開講演会では、一般的かつ教科書的な経済学を超えた、経済思想、市場メカニズム、市場と政府の役割、環境問題、経済と政治におけるパワー関係など、多岐にわたる活発な質疑が行われた。世界最大の資本主義経済大国であるアメリカにおいて、大きな社会的影響力をもつ政党・政治家・政策担当者・経営者の一部に、どのような思想的背景や理論的支柱があるのか、その淵源や普及手段として、作家アイン・ランドの思想・作品が位置していることがふたつの講演とフリーディスカッションからうかがうことができた。アメリカという国は、政治と経済・財界（巨大資本）がその国の政策形成・執行にすぐれて密接かつ強力に関係しているため、表面的にあらわれる政治・諸政策の背後に隠れたバックボーンがどのようなものなのか、それらを多面的に理解することの重要性を再認識できた点で、非常に有意義な公開講演会となった。

講演者のひとりが所属する非営利法人アイン・ランド研究所（Ayn Rand Institute）は、質疑でも明らかにされたように、政治的活動は行っていない。むしろ、一般市民が政治活動を行うにいたる前の、思想形成過程である初等・中等教育において、アイン・ランドに端を発する思想・哲学の啓蒙と普及に注力している。ここでも、アメリカ社会における教育界での自由な啓蒙競争が、苛烈とまではいわないが、深層の部分で熱心に展開されている社会文化を垣間見ることができる。

立教大学経済学部および経済研究所は、特定の思想や団体に過度に傾斜することなく、「自由の学府」たるリベラルな思想とアカデミズムの発展を志している。偏狭や視野狭窄に陥ることなく、よりよい社会の形成や学問・真理の追究をめざし、今後とも社会との連携を深めて、さまざまな分野において学びと考察を深める機会を提供していければと考えている。

担当：遠山恭司（本学経済学部教授）

< 参考 URL >

脇坂あゆみ

「日本人が知らないアメリカ的政治思想の正体 自由至上主義の源流に『アイン・ランド』あり」
東洋経済オンライン（2015 年 12 月 4 日）
<http://toyokeizai.net/articles/-/94979>

脇坂あゆみ

「日本人が知らない“カネの国”アメリカの美德『カネを作る人』がもっとも尊敬される」
東洋経済オンライン（2015 年 12 月 31 日）
<http://toyokeizai.net/articles/-/98804>

脇坂あゆみ

「日本人が知らないアメリカ起業哲学 アイン・ランドは何を説いたのか」
東洋経済オンライン（2016 年 1 月 18 日）
<http://toyokeizai.net/articles/-/100921>

アイン・ランド研究所（Ayn Rand Institute）

<https://ari.aynrand.org/>



脇坂氏の講演



ブルック氏の講演



フリーディスカッション